

社会的に自立しようとする子どもの育成を目指して

～あけもどろ学級・はりゆん・ていんばうと連携した支援を通して～

那覇市立神原小学校教諭

島袋 千賀

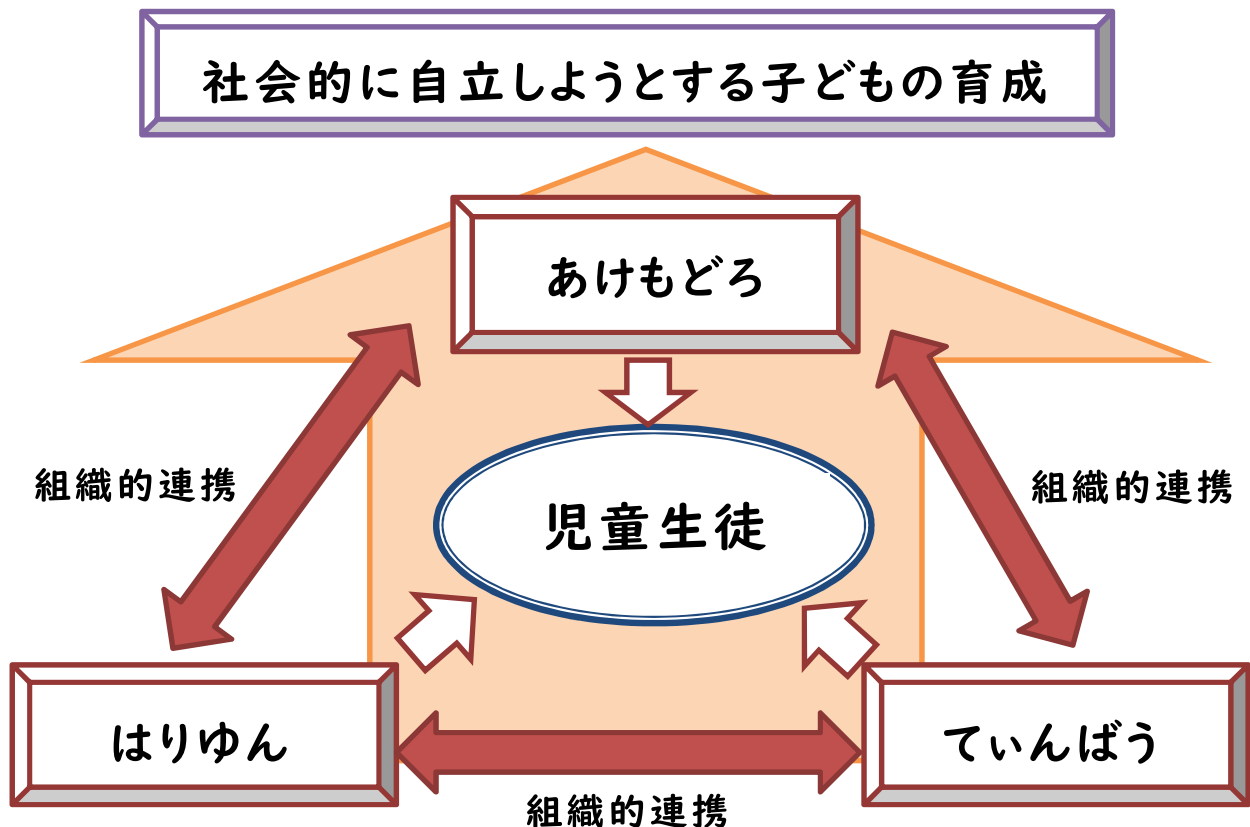
〈研究の概要〉

不登校児童生徒数が依然として高水準で推移する中、文部科学省から「不登校児童生徒への支援は『学校に登校する』という結果のみを目標にするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す必要があること」が示された。

そこで、ソーシャルスキルを構築する中で人と人の距離を理解していく大切な時期に不登校になり、集団活動の場から遠のいてしまう生徒児童の支援として関係機関と連携を図り、支援を通して社会的に自立しようとする子どもの育成を目指した。

本研究では、不登校になった児童生徒の丁寧な情報収集に基づいた理解と共感によるアセスメントと効果的なプランニングで寄り添う支援を行い、コミュニケーション力の向上を目指した集団活動・ソーシャルスキルトレーニングの工夫、また「自分を振り返る力」を伸ばす実践で自己肯定感を高めることで社会的自立への育成をすることができたと考える。

〈研究のイメージ〉



目 次

I	テーマ設定の理由	81
II	研究目標	81
III	研究構図	82
IV	研究内容	82
1	義務教育段階における社会的自立	
(1)	義務教育段階における社会的自立の育成とは	
(2)	あけもどろ学級での社会的自立への支援	
2	児童生徒に身につけさせたい力に向けて	
(1)	組織的なアセスメント	
(2)	自己決定力・自分をふり返る力	
(3)	レジリエンス	
V	研究実践	85
1	あけもどろ学級・はりゆん・ていんばうでの支援を通して	
(1)	S S T (ソーシャルスキルトレーニング)	
(2)	スポーツ活動	
(3)	学習支援	
(4)	自己肯定感を高める支援	
VI	実践を通しての考察	86
VII	成果と課題	89
1	成果	
2	課題	

《主な参考文献・引用文献》

社会的に自立しようとする子どもの育成を目指して

～あけもどろ学級・はりゆん・ていんぼうと連携した支援を通して～

那覇市立神原小学校教諭 島袋 千賀

I テーマ設定の理由

不登校児童生徒数が依然として高水準で推移する中、平成 29 年 2 月 14 日に施行された「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律」の附則に基づき議論がなされ、令和元年 10 月に文部科学省から「不登校児童生徒への支援の在り方について（通知）」が出された。その中に示されている支援の視点には「不登校児童生徒への支援は『学校に登校する』という結果のみを目標にするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す必要があること。また、児童生徒によっては、不登校の時期が休養や自分を見つめ直す等の積極的な意味を持つことがある。一方で、学業の遅れや進路選択上の不利益や社会的自立へのリスクが存在することに留意すること。」と記された。

本県の不登校児童生徒数に関しては、令和元年度は小・中・高等学校合わせて 4600 人を超えており、他県と比べても高くなっている。学校、その他の機関においても対応策を講じて成果を上げているものの、那覇市においても小中ともに不登校児童生徒数の推移は増加傾向である。

人と人との距離を理解していく大切な時期に不登校になり、集団活動の場から遠のいてしまう問題は以前から懸念されている。学校での不登校の未然防止の取り組みや不登校児童生徒への個に応じた支援は不可欠である。また、学校や家庭、教育関係機関等と効果的な連携を図ることで不登校児童生徒への早期の支援体制を確立させていくことは急務である。

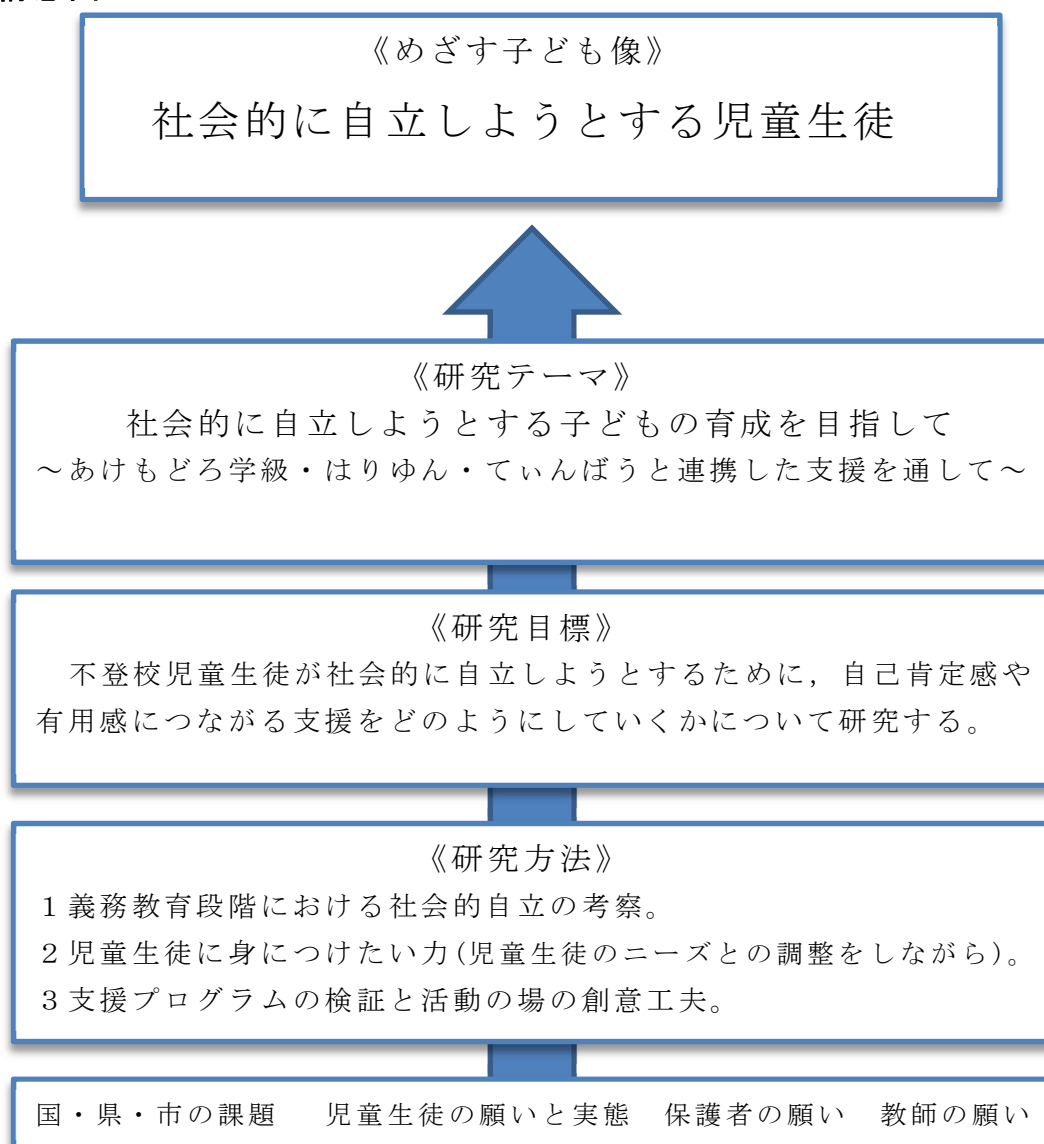
さらに現状として、不登校児童生徒の他にも「別室登校の児童生徒」「遅刻や早退が多い児童生徒」「授業内容が理解できず辛さや嫌だと感じている児童生徒」を不登校傾向のある児童生徒と捉えると自立支援を必要とする児童生徒はかなり多いと思われる。不登校や不登校傾向となる要因として、これらの児童生徒の多くは、自己肯定感の低さから自信が持てず、人間関係に課題を抱えていると考えられる。

そこで本研究では、不登校になった児童生徒の丁寧な情報収集に基づいた理解と共感によるアセスメントと効果的なプランニングで寄り添う支援を行い、コミュニケーション力の向上を目指した集団活動・ソーシャルスキルトレーニングを実践することで、自己肯定感を高め、不登校児童生徒の社会的自立につなげることができると考え、本テーマを設定した。

II 研究目標

社会的に自立できる児童生徒の育成を目指して、不登校児童生徒が自己肯定感を持てるような支援の工夫について実践研究する。

Ⅲ 研究構想図



Ⅳ 研究内容

1 義務教育段階における社会的自立

(1) 義務教育段階における社会的自立の育成とは

社会的自立が自分の力で社会に適応し、幸せに人生を送れることと考えると、社会的自立は児童期から青年期、成熟期、老年期と生涯を通して身につけていくことである。その中で、義務教育期における社会的自立の育成をどのようにしていくのかをあげる。

文部科学省「小学校・中学校・高等学校 キャリア教育の手引き」によると、学校におけるキャリア教育にかかわる能力は、児童生徒が将来自立した社会人・職業人として生きていくために必要な能力や態度、資質として四つの領域を挙げている。他者の個性を尊重し、自己の個性を発揮しながら、様々な人々とコミュニケーションを図り、協力・共同してものごとに取り組む「人間関係形成能力」、学ぶこと・働くことの意義や役割及びその多様性を理解し、幅広く情報を活用して自己の進路や生き方の選択に生かす「情報活用能力」、夢や希望をもって将来の

生き方や生活を考え、社会の現実を踏まえながら、前向きに自己の将来を設計する「将来設計能力」、自らの意志と責任でよりよい選択・決定を行うとともに、その過程での課題や取り組みに服する「意思決定能力」である。

この四つの領域は。個々の成長において不可欠なものであり、この能力の育成が社会的自立の育成であると考え。学校教育で「生きる力」が重要視され、学ぶことが将来働くことへと関係づける時、義務教育期でキャリア観を持つことは必要で、社会的自立に向けた教育である。

(2) あけもどろ学級での社会的自立への支援

「不登校児童生徒への支援の在り方について」（令和元年10月25日付け文部科学省初等中等教育局通知）にあるように児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す必要がある。児童生徒によっては、不登校の時期が休養や自分を見つめ直す等の積極的な意味を持つことを、重要視している。

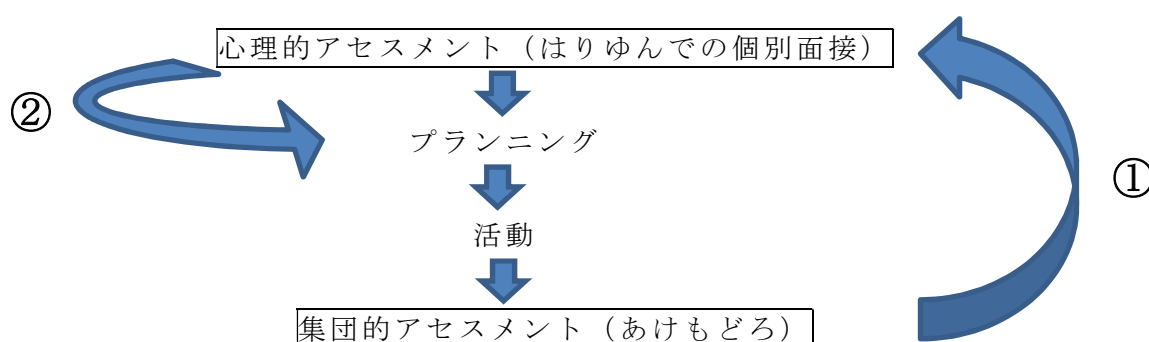
あけもどろ学級においても学校に登校するという目標と同等の社会的自立を目指す支援をしていく必要がある。他者との関わりを意図した集団活動を積極的に取り入れ支援していく。

2 児童生徒に身につけさせたい力に向けて

(1) 組織的なアセスメント

目の前にいる児童生徒に身につけさせたい力を考察するために必要不可欠なのがアセスメントである。アセスメントとは、「事実」に基づく「仮説検証」であり、今、起こっている問題や課題について、その背景にあると思われる要因を含めて情報収集して課題の整理を多面的に、総合的に判断していくもので「見立て」である。

【組織的なアセスメント】



上記のようにアセスメントとプランニングに基づく活動をくり返して常に連携を取って多面的に児童生徒をアセスメントして理解を深めていく。

(2) 自己決定力・自分をふり返る力

自己肯定感の低い児童生徒は、他人の視線や言動が気になったり、ちょっとし

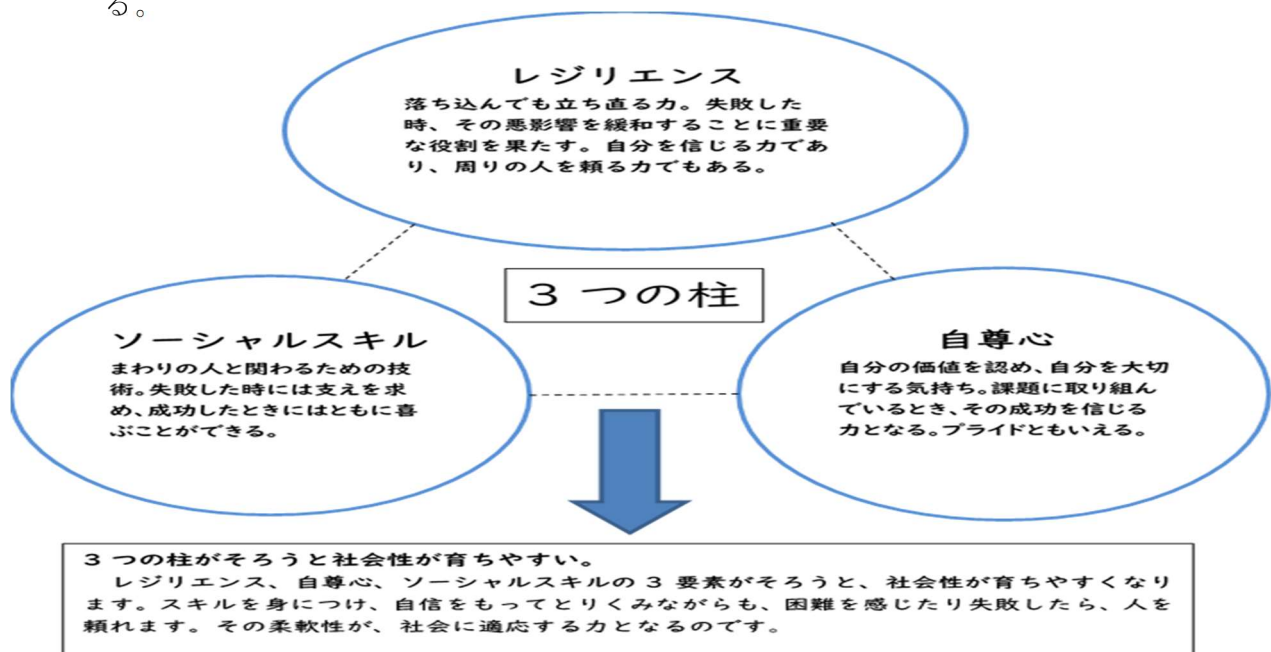
た失敗で落ち込んだりすることが多く、自分の存在を肯定的に受け止められないでいる。そのため物事に積極的になれず、他者との関わりにも臆病になりがちである。結果、良好な対人関係を構築することが困難となる。

日々の生活の中で自分の取った言動で達成感・成就感を味わうことで自己肯定感を持つと考える。しかし、自己決定することに臆病になり他者に決めてもらったり、いい結果につながった時も、自然と自己をふり返り、自分の変容に気づけないと達成感・成就感は感じられない。そこで、自己決定することや自己をふり返る活動を意識的に行い積み重ねることで自己決定力や自己をふり返る力を育てることが、自己肯定感の向上につながると考える。

(3) レジリエンス

レジリエンスとは、①心の回復力や弾力、しなやかさ②逆境や挫折から立ち直る力③ものが自分の思い通りにはいかず、落ち込んだときに機能する力の事である。自立して社会生活を送っていくためには折り合いをつける力は重要である。レジリエンスは、自分と折り合える力である。一方、他人と折り合える力はソーシャルスキルであり、この力は、これまでのあけもどろ学級の活動の中でもSST（ソーシャルスキルトレーニング）で児童生徒に身につけたい力として支援活動してきた。レジリエンスも日常活動や体験活動など、レジリエンスを身につけられるよう人を頼って成功する体験やサポートを受けて気持ちを切り替えることを積み重ねて育成してきた。

藤野（2015）らは、社会性を育てる三つの柱として「レジリエンス」「ソーシャルスキル」「自尊心」を挙げている。社会的自立とは、なんでも一人でする自立とは異なり、折り合いをつけながら、自分でできないことは、誰かにお願いする力をもってすることと考え、その力を身につける支援が必要であると述べている。



「発達障害の子の立ち直り力『レジリエンス』を育てる本」藤野 博 監修 講談社

V 研究実践

1 あけもどろ学級・はりゆん・ていんばうでの支援を通して

(1) SST（ソーシャルスキルトレーニング）

レジリエンスの 3 つの柱に挙げられているソーシャルスキルを高めるために、はりゆんで継続相談している児童生徒と共に、ソーシャルスキルトレーニング（以下 SST）を毎週火曜日実施する。SST は、小集団でロールプレイによる実演やゲームで体感するなどの体験を通して対人関係を円滑にするための技法を訓練する。

S→ソーシャルは「社会」とか「人づきあい」という意味。

S→スキルは「技」「やり方」「コツ」という意味。

T→トレーニングは「訓練」という意味。

(2) スポーツ活動

相談室「はりゆん」が主催しているスポーツ活動にあけもどろ学級の児童生徒も参加している。

体を動かす楽しさを味わいながら対人関係を広げ、小集団におけるルールを守り、互いに協力することを学ぶ。また、SST の要素を取り入れることでコミュニケーションスキルを身につける。

活動始めにフリータイムで卓球やバトミントンを自分で選び、緊張をほぐしながら集団活動への準備をする。次に集団活動「みんなでスポーツ」で、交流を図る。あけもどろ学級以外の児童生徒との交流以外にもはりゆんの相談員とも活動するので終了後の集団的アセスメントをはりゆんの相談員と協働で行う。

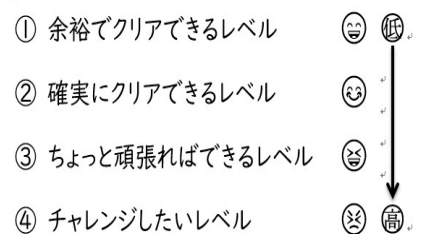
(3) 学習支援

毎週火・水・木曜日の 13:00～15:00 は、学習支援室「ていんばう」で学校から出される課題や個々の習熟度に応じた学習に参加する。学習に参加する事前には、学習支援室の職員に児童生徒のその日の状態を知らせ、児童生徒の個々の学習状況・支援計画を共有する。

(4) 自己肯定感を高める支援

社会的自立に自己肯定感が必要であることを述べ、そのために身につけさせたい力として「自己決定力」「自分をふり返る力」をあげた。そのための支援活動として午後の学習において月曜日に 1 週間の学習計画とめあてを立て、金曜日には計画をふり返り自己評価を行った。また、次週に計画を立てる時には、意識して先週のふり返りをもとに計画を立てることを促した。自分でめあてを決めるという自己決定の場を数多く持つことでスモールステップでの達成感を感じられると考える。そして、毎週、めあてを意識したふり返りをするすることで自己をふり返る力を育成する。

活動を始める時には、手立てとしてめあてとふり返りにレベルを付けた。当初、①～④と数字で提示したのだが、生徒が、顔文字で書くことを提案して始めることになった。（図右）



VI 実践を通しての考察

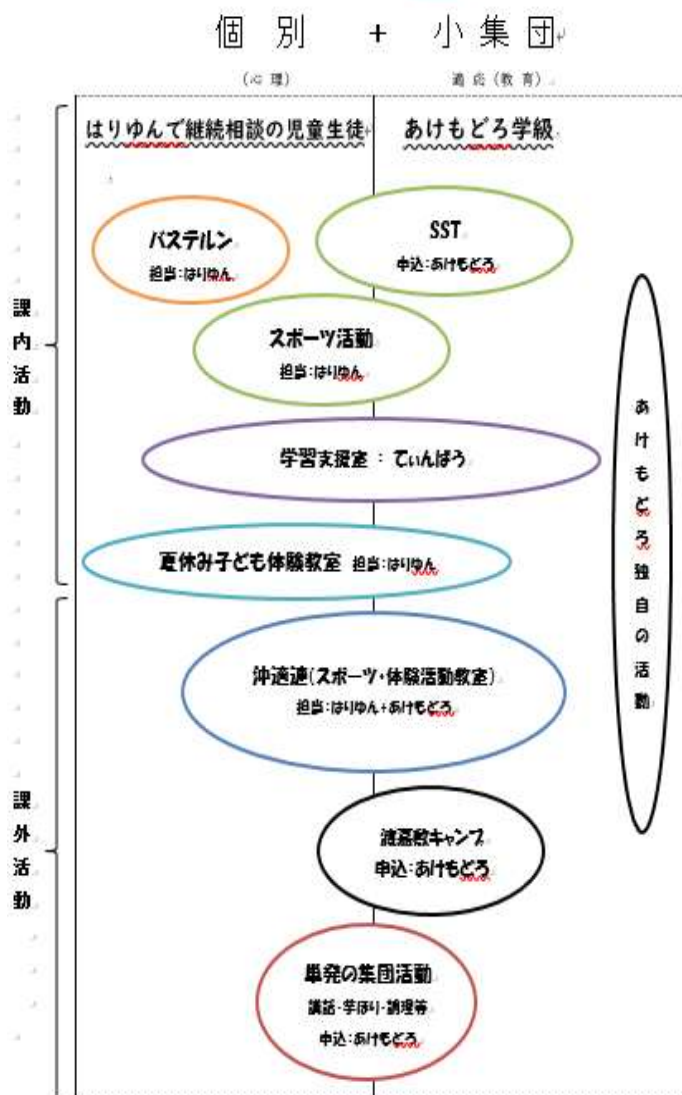
本研究では、社会的に自立しようとする子どもの育成を目指してあけもどろ学級・はりゆん・ていんぼうでの支援活動を研究してきた。常に目の前の児童生徒の困り感の把握に努め自己肯定感の向上への支援をした。研究実践に挙げた支援活動の他にも、施設見学や体験学習等がある。どれもあけもどろ学級単独での支援活動ではなく相談室「はりゆん」や学習支援室「ていんぼう」との協働により行ってきた。

はりゆんでの継続相談で小集団活動へと支援の幅を広げる活動の場の一つとしてあけもどろ学級があるが、入級しても必要に応じて個別相談をはりゆんの担当の相談員で行っている。このように、あけもどろ担当以外にも児童生徒が相談できる人がいるということは心のよりどころが増え、自分を見つめたり、困り感を把握できただけでなく、社会的自立の育成に必要な他者との交わりの場も多くなる。また、あけもどろ担当も自分

だけの児童理解にとどまらず、多面的な視点で児童生徒を理解することができる。研究実践で述べた自分をふり返る力を伸ばす支援活動の成果も学習支援室「ていんぼう」との連携で行われた。ていんぼうからの情報より児童生徒の学習状況を知ることができ、あけもどろでの学習支援や諸活動に役立てることができた。

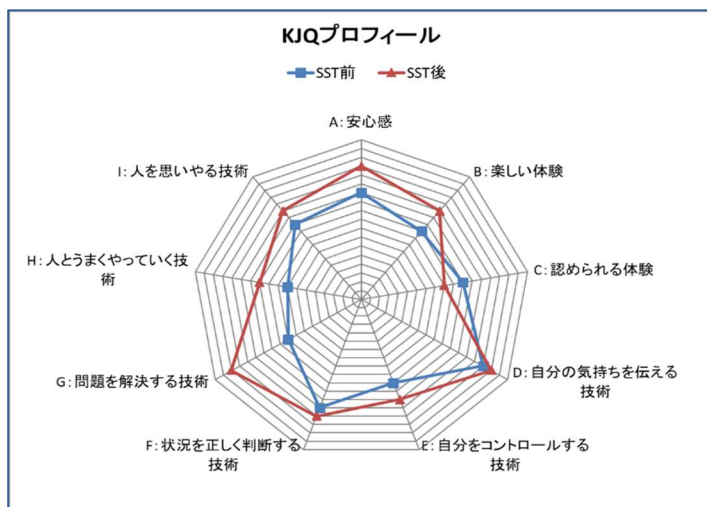
次に、自己肯定感を高める支援のふり返りを考察する。当初、めあてに「今週も午後の学習を頑張ります。」ふり返りには「今週は休みが多かったので、来週は休まないようにしたい。」と書くなど、学習のめあてやめあてに沿ったふり返りが難しそうであった。「ふり返る」という客観的に自分の行動を見つめる力が弱かった。10月頃に「この活動を通してどうですか」と問いかけたが、「わからない」「変わらない」という言葉が返ってきた。自分をふり返れてないためか自信がないような返事であった。しかし、12月頃になるとめあてを意識した具体的なふり返りが書けるようになってきた。活動をくり返し続けることで自信を持ち、自分を客観的に見れるようになり自分をふり返る力を伸ばしてきたと考える。(図2)

教育相談課チーム：はりゆん・あけもどろ・ていんぼう活動イメージ図



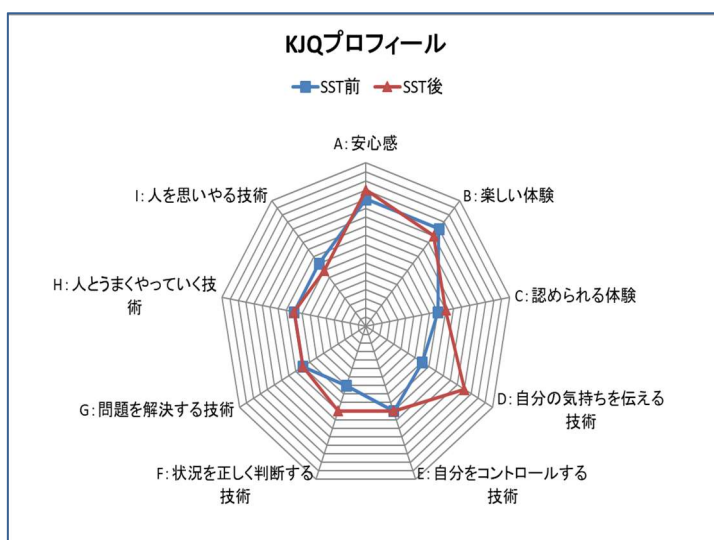
さらに、KJQ 調査で個々の児童生徒の変容を考察する。

(A さん)



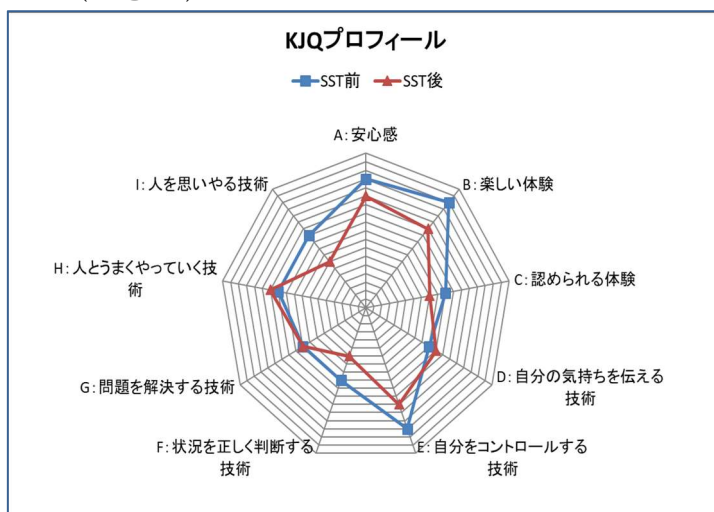
SST 前と比べ全体的に指標が高くなっている。また、SST やあけもどろ学級活動など様々な小集団活動に参加することで、自己決定の場を経験し、自ら決めた事が受容されていくことで思考に柔軟性が出てきた。これまで自身で判断する時には、物事に対して 0 か 100 で決めているように見受けられたが、30 でも良しとする場面が出てきた。このことは、G、「問題を解決する技術」の高まりからも裏付けることができる。

(B さん)



SST で学んだことを日常生活の中でも、「こうすればいいんだよね。」と実践する姿が見られた。D「自分の気持ちを伝える技術」の高まりは、自分がやってみたいことをあけもどろ学級みんなに提案したり、写真をみて自分の変化を伝えたりする場面からもうかがえた。I「人を思いやる技術」が若干下がっているが、日頃から自己評価の低さが背景にあると考えられる。また、自分を表現できるようになった分、他者への思いやりが欠けているのではと本人が気にしていると考えられる。他者評価としては、他人への気遣いや場の空気に合わせた言動が数多くみられるようになった。

(C さん)



全体的に SST 前から後に点数は低くなっている指標が多くなっているのは、自己理解が深まりより正しい判断ができるようになったと考えられる。

日常生活においては積極的に他者と関わろうと試みる行動変容がみられ、また、「病気になる限り休まない。」と自分と向き合うことを自ら話し、実際、来所も安定している。H「人とうまくやっていく技術」の高まりは、日常への意欲につながっていると思われる。

このように、児童生徒の将来的な社会的自立を目指していくには、こうした様々な集団で支援することが重要である。担任不在でも児童生徒が困ることなく活動できたのは、日頃からチーム支援をしていたからである。しかしながら学校では、担任一人が指導の多くを背負い込み、教職員集団としての支援体制が十分ではないことがある。児童生徒の社会的自立の育成には学校組織体制の在り方について考察し、一人で抱え込まない学校全体としての支援体制や SC、SSW、教育相談支援員などの他機関との連携をコーディネートしていくことが重要であると考ええる。

VII 成果と課題

1 成 果

- 1 週間の学習計画の中でめあてとふり返しをすることで個々の成長や個々のつまずきを把握できた。また、次の支援の手がかりや修正に生かすことができた。
- 自分で考え判断させる自己決定の場を多く持つことができた。
- スモールステップの継続によって、達成感を持ち、自己肯定感が高まった。
- 日々の活動や体験活動を通して、主体性や積極性が高まった。
- SST の実践を通して、社会生活や対人関係を営んでいくために必要とされる知識や技能を理解し、対人スキルの取得につながった。
- あけもどろ・はりゆん・ていんばうと連携した組織的な支援をすることで、児童生徒を多面的に捉え児童生徒個々の理解を深めることができた

2 課 題

- 昨年度からのあけもどろ学級継続の児童生徒と新規の入級児童生徒との活動の場の工夫。
- はりゆんで継続相談している児童生徒と共に集団活動が行えるような場の設定の増加。
- 学校や家庭や関係機関の連携を強化する手立て。
- 学校、ていんばうとの連携での学習計画の情報交換。

《主な参考文献》

「不登校児童生徒への支援の在り方について（通知）」 文部科学省 2019

「小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引き」文部科学省（平成 18 年 11 月）

「発達障害の子の立ち直り力『レジリエンス』を育てる本」 藤野博・日戸由刈 講談社 2015